
オープンドシール

鳴鐘新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オープンドシール

【Zコード】

Z5764Z

【作者名】

鳴鐘新都

【あらすじ】

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創つたとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に

居座り続けていた……

そんな御伽噺のような伝承の残る異世界があることなど知らず
現代の日本から落ちてきた少年桜田雪平の人生は一変する。
彼を待つのは戦いと旅の日々、そして仲間との出会い。
頼るべきはチートなどではなく己の心、鋼の魂。彼の明日はまだ見
えない。

プロローグ（前書き）

異世界トリップものです。
暇つぶしきりいの軽い気持ちで読んでいただけないと幸いです。

プロローグ

「……いてえ」

学校の帰りに突然目の前が真っ暗になつたかと思つと
次の瞬間には背中に物凄い衝撃が走つた。

あたりは妙につんとする黒と木の匂いが鼻を衝く。

「おい、お前大丈夫か？」

声をかけられた。よく通る男の声だ。

声の主を探すとそこには妙な男が居た。

年のころは二十代だろうか？

顔立ちその物は美形。だが格好と眼と髪が奇妙だ。

長めの銀髪に紫の眼。それになにかのRPGや漫画の登場人物のような

黒の鎧に腰に帯びた剣。

「くつそ……これが大丈夫に見えるかよ……」

「立てるか？手を貸すぞ」

謎のコスプレ野郎に腕を貸されて立ち上がる。

「ありがとう、助かつたぜ！……でも一体全体何がどうなつて……」

体中に木片やコケやら何やらがついているのに気づき叩き落とす。

「どうやらお前はあそこから落ちてきたようだぞ」

落ち着き払つた態度の男の指差す方向を眺めると
なんと言うか余り受け入れたくない光景が見えた。

俺の住んでいた日本の街の何処かなどいう可能性は今この瞬間消え
うせた。

青い空、茂る森の木々の中に立つてるのは俺が背中から落ちたら
しき建物。

打ち捨てられた礼拝堂や教会のような感じで、屋根の一部が凹んで
いる。

……明らかに俺の落下の痕跡だろう。

「……マジか……冗談きついぜ……ここ何処だよ……」

背中から落ちた落下的傷の痛みすら忘れるほどシャックだ。

これがいわゆる神隠しだやつなのか……

男らしくないが俺は頭を抱えて情けなく呻く」としか出来なかつた。

「……お前運が良いな」

突き放したような響きのあるよく通る声で謎のコスプレ野郎が呟いたので切れそうになつた。

「どこがだよ！」

「お前を見つけたのが俺じゃなく野盗や怪物の類ならお前は死んでる」

こいつの冷徹とも言える斬つて捨てるような言動

事実と現実だけを直視した言い方に俺は確かに真実の匂いを感じて背筋が寒くなつた。

「……いるの？野盗とか怪物とか聞き捨てならない言葉がきこえたんすけど」

コスプレ剣士は何言つてるんだこの阿呆は、とこいつのような態度で髪をかき上げながら答えた。

「……居るに決まつているだろ？お前は何処の平和な国から來たんだ？」

ああ……いつまでもお前では具合が悪いな。名前は？

「桜田雪平。あなたの名前は？」

「耳慣れぬ響きだな。俺はヴァイス」

端的にそう言つたコスプレ野郎……いや、もうコスプレ野郎と思つのはよそう。

一応落ち着いてヴァイスを観察する余裕が出てきた。
鎧についた細かい傷に小さな汚れ。身に帯びた剣や鎧はどう見ても使い込まれている。

コスプレじゃなく実用品として使わなければこうはならないだろ？それに身のこなしもそうだ。何かの武術をやつていいよと思える。俺も少しだけ心得があるからなおさら良く分かる。

ドックリでもコスプレでもなくひつねりは本当に訳の分からぬ異世界らしい。

「……行く当ても無い、金もねえ、帰れるかどうかもわからねえ。何でこうなった。俺の未来も明日も全く見えねえ」

打ちひしがれて地面に手をつきがっくりと氣落ちする俺にヴァイスが深いため息をついた後声をかける。

「……見捨てるのは簡単だが、それは余りにも安易すぎだな。このままでは確実に野垂れ死ぬな、それも面白くない。雪平、なんとかしてやるからついてここ」

やべえ、この人かっけえ……

人情が身にしみる……涙出てきそうだ……

コスプレ野郎なんて思つてすいませんでした。

「すいませんよろしくお願ひしますヴァイスさん!」

「ヴァイスでいい。さんは要らん。

ああ、生活が安定してきたらちゃんと掛かった費用は請求するからな

しつかりしてくるなあ……

いや、それでも十分ありがたいけど。

第一話・郷愁、そして示された目的

俺がこの謎のファンタジーな世界に流れ着いてもう何キロ歩いただろつか？

正確なところは少しもわからない。

整地されていない森を歩くことなど初めての経験で何度も足をとられて躊躇、木々から生える小枝に引っかかれ足元に生える草の棘に皮膚を刺された。体は鍛えているつもりだったが慣れない事が重なりすぎて足は疲労でガクガクだ。

ああ、ベッドで眠りたい……

夕方になつた頃森を抜けて少し開けた丘のところ、ヴァイスが口を開いた。

「近くに水場もある。今日は此処で野営するぞ」

「ういーす……」

ヴァイスは俺に小さなナイフを差し出していつも命じた。

「このあたりの草を刈つて寝る場所を作るんだ。

小さな石とかも取り除く

それからヴァイスと俺は一人で草を刈つて石を取り除く作業に没頭した。

なんとかその作業を終えて座り込んでいると

ヴァイスは荷物から文字が刻まれた杭のようなものを取り出し地面に幾つも打ち込んでいく。ちょうどいましがた作った空き地を囲うようにだ。

「なんすかそれ？」

「虫除けと獣避け、警戒の式が刻まれた結界を作ってるんだ」

端的にヴァイスはそう説明した。

「……そっすか」

やつぱり魔法もあるんだ。

原理を尋ねたり効力に懷疑を示す余裕は今の俺には無い
まったく……ファンタジー過ぎて困るぜ……

それから一人で設営を完了させ

ヴァイスの煎てくれたむやみやたらと苦いお茶のようなものを飲んで

体を温めながら火を囲むことでようやく俺は人心地つけた。

「あ、帰りてえなあ……」

我ながら情けないと思いつつしみじみと俺は呟いた。

単調で機械的な学園生活の中で馬鹿なことをする。

日本で高校生をやつてた時はこれほどつまらないものは無いと
思っていたのだったが、いざ全く取つ掛かりの無い世界に放り出され

て初めてありがたみが身にしみた。

平和も退屈も結構なことじやないか。

コンクリートで海も川も大地も固められて鉛色の陰鬱な空
薄汚れていても、やはり故郷は故郷で楽しい事や美しいことも確かに
にあそこには有つたのだ。

だが今俺の眼に映るのは自然で一杯のクソッタレファンタジーの夜
の闇ばかり。

文明の光などありはしない。

しかも怪物や追いはぎなどという現実味の無いものが跋扈する危険
な闇だ。

「帰りたい、か。そうだな……故郷はいいものだ
それがどんな厳しい所であるうとも……」

ヴァイスから意外な一言が聞けた。

自分でも正直情けない事を言つたと思う

てつくり何か斬つて捨てるようなことを言われると思つたのに予想
外だ。

「意外だな……俺、てつきり甘えるなみたいなことを言われるかと
思つた」

「お前は迷つて此処にきたのだろう？誰だつて心細いはずだ。
それに俺だつて故郷に帰る事を目指しているんだ。

七つの【大冷孔】を解放し、遙か遠い故郷に帰る

物憂げにヴァイスはそう呟いた。

悔しいがいやしかし絵になるなこの男イケメンすぎるだろ。
ちょっと現実離れした美形だ。

その物憂げな表情だけで女の子が放つて置かないだろ。
向こうの世界ならそのままアイドルや俳優でもやつていけるだろ
なと思う。

それはそうと俺は思つた疑問を口にする。

「大冷孔ってなんだ？」

ヴァイスが本当に驚いたような表情を形作る

「本当に知らないのか……？お前は何処から来たんだ？」

「日本だよ！にっぽん！ああ、こっちじや通じないかも知れないな

えーと、チキュウの日本！テラ！アース！ガイア！」

俺は思いつくがままにそれっぽい世界の名称を並べ立ててみた。

「……本気で言つてはいるのか？」

ヴァイスはいぶかしげに眉をひそめた。

「え、なんか俺おかしい事言つた？」

「地球も日本とやらも知らんがまさかガイアとは……」

「え。知つてるの！？」

「ガイアは彼岸、あの世だ。天上有る死後の世界……魂の行く場
所とされている」

「あの世……マジかよ……こっちの世界……あの世……

一体全体……此処はどうなつてるんだ……」

「信じないわけではないが何処から来たかは吹いて回らないほう
がお前のためだ」

「分かつたよヴァイス……頭のやばい奴扱いされたくないもんな」

「聞かれたら記憶喪失とでもしておけ」

「おう……で、大冷孔って何なんだ？」

「それを説明するにはこの世界の神話から始めなければならないな」

そういうてヴァイスは語り始めた。

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創つたとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に居座り続けていた……

「へー。なんか、聞いたことのあるよつた無いよつたな空の星たちの支配権？何か引っかかるんだよなあ。

似たような話をどつかで聞いたよつたな……

「小さな規模の冷孔は山ほどあって、その傍に村があつたりするな。地上にはびこる怪物退治や冷孔に居座る大物の怪物を退治する職業【バスター】は今も引く手数多だな

功績によっては栄達、栄耀の道が開けるし貴族になれることがある」「なんとなーくニコアンスで冷孔がこの世界で重要視されてるのは分かつたけど何故なんだ？」

そして何で怪物が居座つてるのは分かつたけど何してるんだ?どつして怪物をどけなきやならない?」

「あー。そこも説明しないといけないか……いいか?冷孔を開放する利点の方から説明するとだな……

第一に冷孔の開いているところと閉じている所では土地の実りの豊かさが全く違うんだ。

それに冷孔から出た魔力だけじゃなく冷気は食料の保存に使える。

第二に魔法で出来ることが増えるんだ、冷孔のバックアップ有りと無しじやその強さは比較にならなくなる。

煮炊きする火。安全な水も魔法で出せる。魔法で作られる様々な便利な魔道具も作れる……

何より大きいのは魔物、怪物避けの結界を冷孔の魔力で展開できることだ。

冷孔の開いていない土地でも魔法は使えるが生命力精神力を直に削ることになる

「あー。なるほどなあ……食い物と技術と防衛か……大事だよな」子供でも知つてることなんだがなあ、とヴァイスが肩をすくめ付け加えたのがちょっと辛い

ほんとに、迷い込んできただけの一般ピープル、健康優良日本男児なんだよおれは。

「他にも魔物をどけなきやならない理由はな

悪神、邪神の使いとされている魔物や怪物は基本的に人を殺し、喰う

「うわあ……」

「冷孔に居座る大物は魔力を吸つて生きるからその場から殆ど動かないが……」

「その大物の怪物に魔力を食われてその冷孔は使い物にならない、と」

「その通り。冷孔に居座つてる大物は地上をうろつくな怪物や魔物とは比較にならんくらい強い。

保有している魔力の桁が違うからな、肉体も強化されてるし中には強力な魔法を使う知能の高い奴もいる」

「なるほど、じゃ、大冷孔つてのはそれの凄い奴か

「ああ、現在見つかつての大冷孔は全部で十、その内解放済みは三

つ……

現在、世界最大の三つの都、帝都、王都、神都になつてゐる

「なんか凄いんだな」

「一個でも解放すれば最大級の名声と富が得られるだろうな。歴史上、英雄と勇者と初代教皇以外、大冷孔の解放には成功していない……」

さつき、一般的な神話に対しては話しただろ?」「善き神様が、とかつてやつだろ?」

「冷孔の解放は民を富ませ怪物の脅威から人を護るだけではなく神意にも沿うと

一般的には考えられている。冷孔を解放すればするほど悪しき神の力は弱まり善き神が強くなる……

つまりは宗教上の権威も非常に大きいんだ」

「なんか色々ともめそうだなあ」

「そう、もめる。具体的には冷孔を開放する命知らずは常に歓迎されるが開いた後の利権がなあ……」

「まためんどくさい話だなあ……細かいことはあんまり考えたくないぜ。」

とりあえず冷孔を開放すれば皆にとつて良いんだろ?」「

「民は富むな。それがきちつと分配されるかどうかは別問題だが」「だつたらそれでいいんじゃねーの?」

「……それにな、もし雪平が本当に帰りたいいや、生身のままガイアに行きたいのなら……大冷孔を開くことでしか可能性はないと思う」

「どういうことだ!?」

「大冷孔の魔力を利用してガイアまでの空間を繋げる魔法を使つんだ。」

冷孔の魔力を利用して長距離転移をする術式は存在するがガイアまでとなるとまるで未知の領域、雲を掴むよつた話だ

「未知だらうが何だらうが可能性があるならとにかくやるつきやねーよなあ……」

「そういう結論になるのか?」「

「はい?」

なにいつてんだ。その結論しかないだろ。

「俺が送つてやるから危険を冒さず街で暮らすとこう手もある」

「やだよ。チャレンジしないうちに諦めて安易な道に走るのなんて俺の世界そんな奴らばっかりだぜ。そんなの俺はもうごめんだ。

危険は嫌だけどさ、どうせ命は軽いんだ。

やつても居ないのに逃げるのは死ぬより嫌だ

「夢はでつかぐハーネは熱く!! 能力も見た回も持つてゐる金が画直の拳を握り締め自分は言い聞かせるもとに俺に叫えた

全てじゃねーだろ！

男の生れ道は本業は必要で賴れるのには

古の焼物窯の跡の世界に現角も賛同もされないし、
窯は二つ以上の三を表す子をもつて居る。

魏其魏其之世，其所以得名者，以其能一于其私也。

「うす、が、いた。」

でも時代遅れだろうが何だろうが俺は好きなものは好きといつ。

それが本当の個性ってやつなんじゃねえの？

「……う、ううう、はーははははーー」これは良い

！！痛快で傑作だ！！

俺みたいな大黒鹿が他にも居たとはな！！

「お腹直観」の「お」は「おおきい」の意で、お腹が大きいことを意味する。

十分大馬鹿の戯言、鼻で笑われる子供の夢想のよつたものなんだよ。

一つで英雄や勇者に成れる大事なんだ。七つ全部は……」

「いや、それとせいいんだよ。世間がなにと云はれがやん

んだろ？

やつて故郷に帰るんだろう？」

「無論だ」

「じゃあそれでいいじゃねーか」

「……片や、七つの大冷孔を開放すると決めた大馬鹿と
片やガイアを目指すと誓った大馬鹿か……子供の空想だが悪くない。
悪くないぞ

じゃあ、まずは雪平には怪物と魔物を狩り冷孔を開放する【バスタ
ー】になつてもらわなきやな！」

第一話・郷愁、そして示された目的（後書き）

主人公、熱血馬鹿。

そして世界観の説明を少しあせていただきました。

第一話・最初の街

夜明け近く、まだ眠い眼を擦りながら
ガツチガチに石の様に固く、黒ずんだパンと
塩気のきつ過ぎる干し肉の朝食を俺は齧った。

分けてもらつて悪いとは思いつつ俺は切り出した。

「なあ、飯つて何時もこんな感じなのか？」
ヴァイスは少し顔を顰めながらこう答えた。

「……俺は料理は出来んのだ。

自分でやつてみたことも有るが古びた匂う革靴みたいなことになつた
明けても暮れても戦いばかりやつてたからな……
それに旅の間の保存食は何処へ行つてもこんな感じだ
それでも食えるだけマシといった所だな。

「食料自体がこの世界じゃ貴重なんだ」
ヴァイスさんは出来そうなイメージがあつたけどなあ。

冷静沈着で銀髪紫眼の一枚目イケメン剣士つてだけの先入観で
判断するのはやつぱりよくないな。

うつむ、それにしたつてこれは酷い。

やつぱり日本とファンタジー世界じゃ違つんだな……

国によつて大分食文化や料理の腕前は違うつて聞いたことあるナゾ。

日本の食事つて美味かつたんだな。

よし、決めた。

現状に不満を言つるのは誰だつて出来る。

安易な道に流されるのは嫌だ。

自分から建設的な事を始めなければ何一つ変わらない。

「なるほどなあ……一回でいいから今度作るときは俺に任せて貰つ
てもいいですか？」

「心得があるのか？」

ヴァイスが少しだけ嬉しそうな顔と声色をした。

本当に微かな変化だが。

分かりにくい人だが、信頼には値すると思つ。

「多少なら」

「……今、お前を拾つて初めて良かつたと思つたぞ」やつぱり、ちよつとは厄介者と思われてたんだな。何時までもこの立場に甘んじているわけには行かない。速い所、なんとかしないといけないな。

食事の後、朝日に照らされながら俺たちは出発した。道中、絶えずヴァイスが周囲に怪しい影が無いか気を配つてゐる事が良く分かつた。

怪物や追いはぎに不意打ちされるのは俺だつてごめんだ。

こういうところはヴァイスは旅慣れているらしく本当に頼りになる。「タジンの町が見えてきたぞ」

いくつか丘を越えたところで街が見えてきた。

高さは大体三メートルくらいのレンガの壁に囲まれてゐる。

「行くぞ」

「ういーす」

門のところでは草木染と思しき赤や緑のチュニックのような衣服を纏つた商人らしき人が馬車を門の中に入れていた。周囲には皮鎧や金属製の鎧を纏つた護衛や傭兵らしき人たちの姿も見える。

順番を待つて門の前にたどり着くと門番らしき人に呼び止められる。

「そこで止まれ。身分を証明するようなものは持つているか?」ヴァイスは黙つて荷物から銀色のプレートらしきものを差し出す。「バスターか……何時も」苦労さんだな

門番らしきおつさんは俺のほうをジロジロ見てくる。

「見慣れない格好だな……」

「そつちは俺の連れだ。バスター見習いをやらせよつと思つてゐる」「ふむ……」

いぶかしげな目線を送る門番のおっさんに、ヴァイスが何かを握らせた。

「いつも大変だな。これで酒でも飲んで体を温めるといい」

途端に門番の顔が疑惑から喜びに塗り換わる。

「おう、こいつはすまねえな。へへ……話の分かる奴は嫌いじゃないぜ

いぜ

おい、もう行つていいぞ。そっちの餓鬼も死なないよつ頑張る」

たな」

門番のおっさんは掌に握つた銀貨に集中して俺たちをもつ見ていい。

やつと俺たちは町の中に入れた。

「マジ助かつたよヴァイス……俺はこっちの身分なんか有りはしないからなあー」

「忘れていいぞ。金で解決できる面倒もあるとこつことだ。

……その服は目立つし余り戦いには向いていないな

「変に注目を浴びるのもやだしな

また頼りっぱなしにな……ほんと悪いい……

ヴァイスに申し訳ないし

なにも何も出来ない自分がちょっとみじめだった。

「忘れていい。初期投資は仕方が無い。

お前にとつて幸いなことに俺は賭けもやらんし

女を買つたり酒や煙草もやらんから蓄えは少々有る

ほんと禁欲的というかストイックな人だな……

「マジでありがとつござりますアニキ……」

自然とそんな言葉が口をついて出た。

なんだろう、なんだかそんな感じがするんだ。

自分に兄弟や兄が居たらこう呼んでいたと思つ。

「アニキ、か……」

ヴァイスはなにやら考え込んでいたようだったが

直ぐに軽く頭をふつて俺にこう告げた。

「まあいい、宿を取つたら服と鎧、それに武器も見繕わなくてはならん。

「他にもやる」と覚えのじさせこへりでもある、ぐずぐずあんな

「せつて」

ぐだぐだと勧めるのは後でも出来る。

いまはやるべや事をやるだけだ。

第一話・最初の街（後書き）

バスターになる為に最初の一歩を踏み出した主人公。
いまだにヒロイン未登場。女っ気が無いなあ。
本格的に魔法を習得するのは何時になることやら……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5764z/>

オープンドシール

2011年12月20日21時05分発行